



観光を「情報」という視点で捉えてみよう

国立大学法人小樽商科大学 ビジネス創造センター総務部主任 深田 秀 実
商学部社会情報学科 准教授

日本における観光産業は、旅行代理店・ホテル・観光施設といった直接的業種から様々な間接的業種まで、多岐にわたる巨大な集合体を形成しています。経済的な規模をみても、日本国内の観光旅行消費額は、23.5兆円と推計されており（2007年度）、これがもたらす生産波及効果は、53.1兆円となっています（2009年度版観光白書より）。このように観光は、経済規模や関連産業も広く大きく、今後さらに注目される重要産業となっています。本稿では、その観光を「情報」の視点で捉える新たな取組みを紹介しします。

1. 観光情報学会の設立

観光情報学会は、「観光と情報活用の視点から学術研究・実用研究を行い、新しい学問分野としての観光情報学の確立・発展を図るとともに、わが国観光産業の発展とそのための戦略研究に寄与すること」を目的として、2003年9月12日に設立されました。

「情報」をKeyとした観光に関する取組みの必要性について、同学会の設立趣意書には「観光は、基幹産業のひとつなのにもかかわらず、観光に対して情報を切り口として学問として支える基盤は脆弱です。それは、産学官を横糸でつなぐKeyが存在しないからです。そのKeyは情報です。」と記載されています。

この指摘は、従来の観光学において、施策や統計的な分析、文化的な視点からの議論に重きが置かれており、情報技術を活用した観光の質の向上や観光産業の効率化という側面からのアプローチがほとんど行なわれてこなかったことを表わしていると言えるでしょう。

2. いわて観光研究会の活動

観光情報学会では、現在、9つの研究会（「さっぽろ」「たいせつカムイ」「はこだて」「いわて」「かがのと」など）が活動の中心として設立されており、それぞれの地域観光における情報技術の活用について、地元の大学・観光事業者などが連携して研究活動を行なっています。

す。筆者は、2009年3月まで「いわて観光研究会」の運営委員として活動しておりました。

「いわて観光研究会」は、岩手県立大学が中心となって、岩手県内及び関連の産民官学を緩やかに繋ぎ、岩手の観光振興について、情報システム及び情報活用の観点から調査研究を行っています。これまでの研究テーマは、「地域周遊交流型観光における情報活用の在り方（平泉文化遺産の活用等）」「ユビキタス社会における観光情報サービスの事業モデル」などがあります。特に、岩手県平泉地域は世界遺産登録を目指しており、「平泉の観光資源に対して、情報技術をいかに活用していくか」が重要なテーマとなっています。

3. 小樽商科大学の取組み

小樽商大の教員や学生サークルが、小樽観光に関して、地元地域の関係者の方々に協力を頂きながら、「小樽商大マジプロ」などの様々な取組みを行なってきたことは、すでに皆さまご承知のことと存じます。筆者におきましても、2009年4月に着任後、担当する講義「実践プロジェクトマネジメント」の一環として、JR小樽駅ならびに小樽観光協会の方々のご理解とご後援を頂きながら、小樽観光に関わる小規模なプロジェクトを実施いたしました。2010年度は、来樽観光者に対する観光情報提供システムのプロトタイプを構築し、小樽市のご後援を頂きながら、小樽運河周辺エリアにおいて実証実験を行なう予定です。

4. 最後に

観光情報学会の各地域研究会では、産民官学が連携し、一体となって協力体制を整えている地域ほど、その研究活動が活発のようです。組織の枠や個々の立場を超えて「連携」を進めていくことが、地域の発展を支えるKeyになるでしょう。今後も、地域の皆さまと小樽商大が連携を密にして、共に、小樽を元気にしていく活動を進めていきたいと思っております。